平成19年度スタンフォード大学研修報告

広島市立広島市民病院　西丸　英治

1．期待していたこととその結果

私が今回の研修で一番期待していたことは，最先端の研究を行なっているスタンフォード大学での“研究の方法や考え方”を学びたいということでした．全体的な講義内容は非常に充実した内容でしたが，それよりも私は研究室や病院の施設見学に重点を置いて研修に参加させていただきました．今回，日常とはまったく異なった環境や文化に触れることで自分の研究に対する姿勢や考え方の幅が広がったと思います．木曜日には，スタンフォード大学で研究を行なっている大学院生，また他の国から研究留学している学生の方々と話す機会が設けられ，彼らの研究に対する姿勢や考え方は非常に刺激になりました．さらに研修終了後の毎夜の飲み会では，参加者の先生方との幅の広い話をすることが出来，私にとって非常に有意義な時間となりました．最終日には，スタンフォード大学放射線診断部門の総長である Glazer 先生が研究に対して何が必要なのか，また研究に対する姿勢のあり方について講義され，自分が今まで研究に対して抱いていた疑問の答えを垣間見ることが出来ました．

2．放射線技師から見た日本と米国との違い

今回の研修では，スタンフォード大学内にある病院と 3D Lab を見学することが出来ました．米国の放射線技師は日本と違って，専門資格（CT，MRI，RI 等）によって専門に分かれて仕事をしています．この勤務方式では個々のスペシャリティは非常に高くなると思いますが，他のモダリティの技師とのコミュニケーションはうまく取れているのだろうかという疑問を感じました．実際に話を聞いてみると，3D Lab とCT室のスタッフの間ではうまくコミュニケーションが取れていない印象でした．どんなに優れた技術を持った技師でも医療は単独ではなくチームで行なうものですから，1 つのモダリティのみでは本来の能力が発揮できないのではないかと思います．1 つの疾患に対して自分の得意とするモダリティの意義やモダリティ間の位置づけを知ることは重要であると思います．この点は日本の技師は優秀だと思いました．しかし，スタンフォード大学病院の技師の給料を聞いたときには，正直かなり羨ましいと思いましたが‥‥．

3．最も印象に残ったこと

最も印象に残ったことは講義をしていただいた先生方や周りのスタッフの方々に共通して言えることですが，時間に正確です．当たり前のことかもしれませんが，日本では研究会等で予定通りに進行せず，時間が押してしまうことは良くあることで，学会でもありうることなので非常に驚きました．われわれが逆に時間にルーズで，ご迷惑をおかけしたと思います．また，プレゼンテーションの仕方も非常に勉強になりました．英語が不得意な私でも，スライドの内容がなんとなくですが理解することが出来るくらいわかりやすいスライドの構成でした．内容が共通の専門だからという理由もあるとは思いますが，スライドの作り方やプレゼンテーションの上手さが最大の要因だと思います．

4．今後の海外研修のあり方

最初にも述べましたが，日常とはまったく異なった環境や分野を知ることは，自分の生活を見つめ直す良い機会になると思いますし，研究者に限らず重要だと思います．また，米国の医療事情は驚きの連続でしたが勉強になりました．このような制度や常識の違いを知ることは自分の凝り固まった視野を広げられるようになるかもしれません．今後，可能であればこのような海外研修をスタンフォード大学以外の大学でも企画していただければと思います．研修先の負担を考慮すれば隔年で変更するというやり方もありうるのではないかと思います．

終わりに

今回このような機会を与えていただいた日本放射線技術学会の関係者の方々，研修では大変お世話になりましたスタンフォード大学の皆様，決め細やかな配慮をしていただいたリーダーの福西康修先生，研修中の間，親身に私たちのお世話をしていただいた GEYMS の皆さん（吉井様，工藤様，松岡様，木村様，松田様，のぶこ様），また，今回の研修に参加することを快く承諾していただいた広島市立広島市民病院　放射線科のスタッフの皆様に感謝いたします．

筆者（左）と Gary Glazer, MD（右）